毛宗崗本『三國志演義』における養子の表現

仙石知子

はじめに

小説『三國志演義』（以下、『演義』）の通行本である毛宗崗批評『三國志演義』（以下、毛宗崗本）は、底本とした『李卓吾先生批評三國志』（以下、李卓吾本）に多くの改變を加えることで、蜀漢の正統性の強化をはかっている。具體的には仇役である曹操を「奸絕」と貶める一方で、關羽を「義絕」、諸葛亮を「智絕」と高め、「三絕」の表現を物語の中心に据える。[1] そして、毛宗崗本は、こうした改變の過程で、物語の表現をより豊かにするために、中國近世における社會通念を多く利用している。[2]

本稿は、毛宗崗本が、中國近世における家族、就中、養子[3]に關する社會通念を劉封・關平という異姓・同姓養子の表現に、いかに利用しているのかを檢討し、それによって毛宗崗本における蜀漢の正統化の一例を示そうとするものである。

一、宗族繼承における養子の重要性

毛宗崗本の「奸絕」曹操は、異姓養子の子である。したがって、異姓養子の表現は、曹操に直結する。[4] 李卓吾本も毛宗崗本も曹操の「奸」の前提として、曹操の父曹嵩が、宦官の異姓養子であることを記す。しかし、李卓吾本は、曹操が曹參の末裔であり、曾祖の曹節が寬厚で、祖である宦官の曹騰が費亭侯に封建され、父の曹嵩が忠厚純雅であることを併せて記すため、異姓養子の子であることが際立たない。毛宗崗本は、それらをすべて削除した上で、曹嵩が夏侯氏から異姓養子に入ったことを「冒姓」と表現し、曹操の出自を卑しめる。さらに、第一回の總評で、劉備とは生まれが違うと主張する。[5]

大事な物語の最中で突然劉と曹二人の生い立ちの話が入る。一方は幼い頃よりすでに偉大で、一方は幼い頃よりすでに奸惡である。一方（の劉備）は中山靖王の末裔で、もう一方（の曹操）は中常侍の養孫である。（兩者の）高低はすでに判別されている。

毛宗崗本は、曹操が中常侍の「養孫」であることを奸惡の論據としている。後述のように、異姓養子をとって宗族の秩序を亂すことは律で禁じられ、「惡」と捉えられていた。そのような社會通念を利用し、曹操を貶めるのである。

ところが、曹操と對照的に生まれの良さを稱えられる劉備が、やが

て異姓養子の寇封（劉封）を迎える。しかも、劉封は、劉備の義弟である關羽を見殺しにする。毛宗崗本は、この問題をいかに處理するのであろうか。その檢討の前に、表現の前提となる、中國近世の異姓養子に關する社會通念を確認しておこう。

『演義』を分析する際の社會通念の確認には、族譜が有用である。それは、毛宗崗本・第一回の總評[6]に、

今の人は通譜を好み、往往にして同族ではない者を同族と見なしている。試みに桃園の三結義を觀ると、それぞれ姓が違っているので、兄弟の誓いをするときに、同心・同德を優先して、同姓・同宗を優先しなかったことが分かる。

と述べるように、毛宗崗本が、「今」（清代初期）の「通譜」[7]を批判しているからである。毛宗崗本は、族譜を編纂し得る階層を主要な讀者層の一つに想定していたことが分かる。

前近代の中國では、繼嗣が非常に重視されていた[8]。『孟子』の離婁章句に、「不孝に三有り、後無きを大と爲す（不孝有三、無後爲大）」とあり、三大不孝の中でも繼嗣の不在は最も重く扱われる。それでは、實子のない場合、繼嗣はどのように立てるべきとされていたのか。

（浙江）『山陰陡亹朱氏宗譜』卷一・譜例[9]に、

一、子がいない場合は、兄弟の子を後繼ぎとすべきである。尊卑に序を失うのは良くないので、兄弟にも子がない場合には、また近支の中より、昭穆相當の者（祖先を共通とする血緣者で後繼ぎになる順位にあたる者）を立てても良い。（その場合は）繼子某と書き、もとの名の下には、某公の子、出でて某公を繼ぎ嗣となると書いた。もし異姓を乞養する者がいれば、（宗族内に）同族ではない者が混ざるので、削ってこれを除いた。

とある。清代浙江の朱氏は、實子のない場合、兄弟にも繼ぎ得る子がなければ、昭穆相當者を同宗内より選び養子とするよう規定する。近親から遠緣へと男子を探して、その者を立てる。しかし、同宗内に後繼ぎと成り得る者がいない場合は、後繼ぎ不在を回避するため、異姓養子を入れざるを得ない。ただし、その者は族譜から削除されるべしとされていた。これは、異姓養子を後繼ぎにすることが、原則としては許し難い行爲であったことを示すものである。

異姓養子を繼嗣とすることは、近世の族譜だけではなく歷代の律でも禁じられていた。『大清律例』卷八 戶律・立嫡子違法[10]に、

異姓の義子を乞養して、宗族を亂す者は、杖六十。および子を異姓の人に與えて嗣子にさせた者は、罪は同じとし、その子は宗族に歸す。

とある。しかし、繼嗣不在の不孝を避けるべく、しばしばそれは破られた。（廣東）『張氏族譜』卷之一・族規[11]に、

一、乞養　凡そ三十歲以上で子がいない場合は、族内の近親より遠緣へと探すが、それでも相應者がいない場合にはじめて、素姓のはっきりした異姓の子を收養して承繼させることを許す。（その場合は）五歲未滿を條件に、ようやく入繼できる。もしも五歲以上であれば、收養できない。もし子孫に承繼できる者がいるのであれば、妄りに多くの異姓の子を收養してはならない。

とある。清末廣東の張氏は、五歲以下という年齡制限のもと、異姓養子を容認していた。その際にも、子孫に承繼者が存在する場合の異姓養子を禁じている。異姓の養子緣組は、繼嗣の確保のため、望ましくないことと知りながらも、やむなく行わざるを得ないものだったのである。

異姓養子を繼嗣にすることを禁ずる律がありながら、繼嗣の確保のため、實際には異姓養子を入れることがあり、それは本來行うべきではないと認識されていた。かかる社會通念を背景に、毛宗崗本は劉封をいかに表現するのだろう。

二、異姓養子、劉封

劉封が劉備の養子になるのは、劉備の軍師徐庶が曹仁の「八門金鎖の陣」を破って樊城を取った際のことである。縣令の劉泌が寇封（劉封）を紹介する、李卓吾本・第三十六回の場面より掲げよう。[12]

劉泌は長沙の人で、やはり漢皇室の血すじの者だったので、玄德を家に招いて、宴を設けた。このとき甥の寇封が傍らに侍立しており、玄德が寇封を見ると①立派な容貌で、涼やかな話し方であった。玄德は泌に、「こちらはどなたか」と尋ねた。泌は、「わたしの甥の寇封です。②武藝に秀でておりますが、父母がともに死に、わたくしが伯父にあたるので、これを頼って③學業をしております。もともとは羅侯の寇氏の息子です」と答えた。玄德は④養子に迎えて嗣にしたいと考えた。劉泌は喜んで玄德の申し出に從い、甥に玄德を拜して父とさせ、劉封と改名させた。玄德は（寇封を）連れ歸ると、雲長と翼德を拜して叔父とさせた。雲長は、「兄上にはすでにご子息がおいでであるのに、なぜ血のつながりのない養子をとる必要があるのですか。のちに必ず禍が起こりますぞ」と言った。玄德は、「わたしが（彼に）⑤子として接すれば、彼は必ず⑥父としてわたしに接するから、禍が起こるはずなどない」と言った。雲長は不服そうだった。

とある。この場面を毛宗崗本は、次のように書き換えている[13]（毛宗崗本の評には、【　】を附す、以下同）。

この劉泌は長沙の人で、やはり漢皇室の血すじの者だったので、玄德を家に招いて、宴を設け接待した。ただ一人の者が侍立しており、❶意氣盛んな樣子なので、玄德は泌に、「こちらはどなたか」と尋ねた。泌は、「これはわたしの甥の寇封で、もとは羅侯の寇氏の子です。父母がともに死に、ここに身を寄せているのです」と言った。玄德は❷彼を氣に入り、❸嗣として義子にしたいと考えた。劉泌は喜んで玄德の申し出に從い、寇封に玄德を拜して父とさせ、劉封と改名させた。【大事な物語の最中に劉封の後繼ぎ話が入ったが、決して無駄な話ではない。】玄德は（寇封を）連れ歸ると、雲長と翼德を拜して叔父とさせた。雲長は、「兄上にはすでにご子息がおいでであるのに、なぜ血のつながりのない養子をとる必要があるのですか。のちに必ず禍が起こりますぞ」と言った。【❹雲長は關平を（養子に）收めて子にしたが、玄德が寇封を（養子に）收めるのを良しとしないのは、臣の子は後繼者爭いの恐れがないが、君の子は後繼者爭いの恐れがあるからである。】玄德は、「わたしが❺子のように接すれば、彼は必ずや❻父のようにわたしに事えてくれるから、禍が起こるはずなどない」と言った。雲長は不服そうだった。【❼これはのちに孟達が劉封に話す伏線である。】

李卓吾本は、①・②・③と三箇所にわたり、劉封の人柄が優れていることを述べる。劉備はそうした劉封の人柄を知って養子とする。これに對して、毛宗崗本は、②・③を削り、❶「意氣盛んな樣子なので」とするだけである。その上で、玄德は❷「彼を氣に入り（愛之）」養子にした、と敍述する[14]。養子に關して用いられる「愛」という用語

は、清代には如何なる意味を持っていたのであろうか。

滋賀秀三『中國家族法の原理』（注（3）前掲）、第三章第一節によれば、養子を迎える際、實子または昭穆相當者を「應繼」と呼ぶのに對し、親等にかかわらず人柄の好ましい者を選び繼嗣にすることを「擇賢擇愛」と呼び、そうして選ばれた繼嗣を「愛繼」と呼んだ、という。

これについては例えば、（江蘇）『毘陵薛墅吳氏族譜』巻二・新增規條[15]に、

……異姓のまだ抱かれているような乳飲み子を愛繼として、自分の子になりすまさせる者は、各房の分長と族中の公正な人が、連名で（官に）報告すべきである。……

とある。この族譜では、異姓を「愛繼」とし、自分の子としてしまうことを危險視している。毛宗崗本が異姓養子の劉封をとる理由を劉備が「愛」したことに求める背景には、「擇賢擇愛」という清代における繼嗣選定方法が存在した。しかも、毛宗崗本では、②武藝と③學業に秀でている、という李卓吾本の描寫を削除している。このため、「擇賢擇愛」の「擇賢」の要素が失われ、劉封は「愛繼」の資格すら缺くことになる。こうした社會通念を背景に讀めば、關羽の怒りの必然性はさらに鮮明になるであろう。

關羽は、波線部のように、實子があるのだから「血のつながりのない養子（螟蛉）」をとる必要はない、と怒る。怒りの表現に書き換えはないが、毛宗崗本は養子とされる劉封の資格を變えることで、關羽の反論はより強く表現される。また、李卓吾本は、劉封を④「養子に迎えて嗣にしたい（欲過房爲嗣）」と劉備に語らせている。「過房」とは、同宗者から家を嗣がせるために養子を入れる行爲をいう[16]。異姓養子である劉封について「過房」を使うことは本來正しくない。

これに對して、毛宗崗本は、劉封を愛し（❷）、❸「嗣として義子にしたい（欲嗣爲義子）」とする。李卓吾本を引き繼ぎ「嗣」とすることは、すでに劉禪がいる以上、社會通念として誤りである。毛宗崗本は李卓吾本の「嗣」の字を繼承しつつ、さらに、毛宗崗本は「愛繼」の資格すら失わせて、關羽の反對をより義にかなったものとするのである。關羽の怒りへの返答も書き換えられる。

李卓吾本では、劉備は、「わたしが（彼に）⑤子として接すれば、彼は必ず⑥父としてわたしに接する（吾待爲子、彼必待我爲父）」から禍が起こるはずなどない、と反論する。それが、毛宗崗本では、「わたしが❺子のように接すれば、彼は必ずや❻父のようにわたしに事えてくれる（吾待之如子、彼必事吾如父）」から禍が起こるはずなどない、とされ、「爲子」から「如子」と表現が弱められる。關羽の正義の言辭を受けた劉備の戸惑いや後悔が、「爲」から「如」への一文字の書き換えにより表現されているのである。

その上で、毛宗崗本は、❹【雲長は關平を（養子に）收めて子にしたが、玄德が寇封を（養子に）收めるのを良しとしないのは、臣の子は後繼者爭いの恐れがないが、君の子は後繼者爭いの恐れがあるからである。】という評をつける。君主の養子は、後繼者問題を起こす可能性がある。こう述べて毛宗崗本は、「義絕」關羽の先見の明と正論を稱えるのである。これが❼關羽を見殺しにする劉封を批判するための伏線であることは言うまでもない。

以上のように、毛宗崗本は、劉封に關する記述を書き換え、異姓の劉封を養子とすることがいかに正しくないかを强調し、劉封を養子にする劉備の行爲を批判する關羽の義を描く。さらには、關羽の同姓養

子である關平の忠を描くことにより、劉封の反逆を際立たせるという手法を見せていく。

三、同姓養子、關平

史實によれば關平は、關羽の實子であるが、『演義』では、嘉靖本の段階からすでに養子とされている。[17] 毛宗崗本は、あえてそれを改めず、同姓養子の正しさを關平を通じて描く。それにより、異姓養子の劉封、ひいては曹操の奸惡さと對比するのである。關定が關平を紹介する場面から李卓吾本・第二十八回を揭げよう。[18]

（關定は）二人の息子を呼んで挨拶させた。雲長は「お二人のお名前は何と申される」と言った。（關定は）①「長男は關寧といい、學問をしております。次男は關平といい、武藝を學んでおります」と答えた。……雲長は（劉備を）門前で出迎え、手を取り合い涙にくれた。關定は二人の息子を連れて、草堂の前で拜禮した。玄德はその姓名を尋ねた。②雲長は、「この方はわたしと同姓で、次子をわたしと同行させたいと望んでおられるのです」と言った。玄德が、「歲はいくつだ」と聞いた。關定は、「次子は關平といい十八歲でございます」と答えた。③玄德は、「長者はすでにご子息を雲長に同行させる心づもりがおありのようですが、わが弟にはまた嗣がおりません。ご子息を雲長に與えて、嗣にするというのはいかがか」と言った。關定は、「もしそのような命を受けることができますならば、從わせていただきます」と言った。玄德は禮を述べた。④關平はこれより、雲長を父とした。……⑤また新たに子龍を得て、玄德の喜びは限りなく、連日宴を開き、兄弟の再會を祝った。

これを毛宗崗本は、次のように書き改めている。[19]

（關定は）二人の息子を呼んで挨拶をさせた。【また二人の少年に出會った。ここではまだ二子については詳しく語られず、絶妙である。】……關公は門前で（劉備を）出迎え、手を取り合い涙にくれた。【劉と關はここでようやく再會した。「啼哭」の二字はまるで子供が親を深く慕うように慕う樣子を表すかのようだ。】關定は二人の息子を連れて屋敷の前で拜禮した。玄德は姓名を尋ねた。❶關公は、「この方はわたしと同姓で、息子が二人おられます。長子は關寧といい、學問をしております。次子は關平といい、武術を學んでおります」と言った。【二子の姓名と學業について、ここで補われ、❷關公の口から說明され、絶妙である。郭常の子は不肖であったが、關定の子はまた賢で、またはっきり區別され對照されている。】關定は、「いま次子（の關平）を關將軍に同行させたいと存じますが、お許しいただけるでしょうか」と言った。【郭の子は不肖だったが郭常は側に置くことを願った。關の子は賢だったが關定は同行させようとした。つまり郭常は一般的な感情から拔けることができなかったが、關定はおのずから定見があった。】玄德が、「歲はいくつだ」と聞いた。關定は、「十八でございます」と答えた。❸玄德は、「長者のご厚意に深く感謝いたすところです。わが弟にはまだ子がおらず、今そこでご賢息を子にするというのは、いかがか」と言った。【❹これは同姓であるからこそ思い出される。（劉と關という）異姓の者がすでに兄弟となっているのだから、同姓の者が父子になってならぬはずがなかろう。】關定は大いに喜んで、❺すぐに關平に命じ關公を父として拜し、玄德を伯父と呼ばせた。【關公はもともと兄

（の劉備）を捜していたが、突然に子を得た。玄德はようやく一人の弟（の關羽）に會えたが、また一人の甥（の關平）を認めることになった。奇文奇事である。❻以前玄德は（逃走の）途中で妻を殺して食べさせてくれた劉安に出會ったが、今度は關公が途中で後繼ぎにと子を手放してくれる關定に出會った。また遙かに（同姓であることが）照應している。】……❼また新たに趙雲を得て、關公はまた關平・周倉の二人を得て、喜びは限りなく、連日宴を開いた。【實に喜ばしい。】

李卓吾本では、①關平が「武藝を學んで（學武藝）」いることを關羽に傳える者は、關定である。關羽が關平を「學武藝」と認めたわけではない。これに對して、毛宗崗本では、❶關平が「武術を學んで（學武）」いることを關定ではなく、關羽が劉備に傳えている。關平を「學武」と認めたものは關羽なのである。これにより關羽が關平を迎えることの主體性が表現される。毛宗崗本は評に、❷「關公の口から說明され、絶妙」と述べ、改變の效果を確認する。李卓吾本では、關定に「學武藝」を傳えられても、關羽はすぐに養子とするわけではない。①から②の間の中略部分に、劉備が袁紹から脫出する話が挾まっている。そのため③關平を養子（嗣）に勸める劉備の發言は、あくまでも劉備の意志として表現される。毛宗崗本もまた、關羽が「學武」と認めた❸關平を養子（子）に勸める者は劉備である。しかし、脫出の話を移すことで、關羽による❶「學武」の發言を受け、すぐに❸劉備が養子に勸めるので、關羽の發言を踏まえて劉備が養子を斡旋したように讀み取り得る。その上で、毛宗崗本は評に、關羽と劉備が異姓で義兄弟となったように、❹「同姓の者が父子になってならぬはずがなかろう」と述べ、同姓養子の正當性を强調する。李卓吾本の「嗣」を「子」にする書き換えにも注目したい。のち關羽に實子が生まれれば、その子が「嗣」となるからである。

また、李卓吾本は、④關平と關羽が父子になったことを述べるに止まるが、毛宗崗本は、❺「關平に命じ關公を父として拜し、玄德を伯父と呼ばせ」ている。關羽・關平の親子關係に關平・劉備の伯父甥關係を加え、二人の關係を三人の關係へと發展させる。❻評では關平を關羽に與えてくれた關定が關羽と同姓であることを、かつて妻を劉備に食べさせ飢餓から救ってくれた劉安が劉備と同姓であった點で照應すると述べ、同姓の重要性を確認するのである。

さらに、李卓吾本は、劉備と關羽との再會に⑤「子龍」を加えて喜びとするだけであるが、毛宗崗本は、關羽が❼「關平・周倉」を得た喜びを加える。關羽が關平を養子に迎えたことを劉備が趙雲と再會したことと同列視するほど重視するのである。

毛宗崗本は、異姓養子の劉封からは、李卓吾本に記されていた②「精熟武藝」を削除した。同姓養子の關平には、關羽が❶「學武」を主體的に認めさせたように書き換えを加えた。ここに、異姓養子の劉封と同姓養子の關平を對比しながら、同姓養子を認め、異姓養子を貶めていく、という毛宗崗本の思想を見ることができる。さらに、異姓養子の劉封との差異を際立たせるため、毛宗崗本は、關平が劉備とも伯父甥の關係を結んだことや趙雲とともにその加入を喜ぶ敍述をも加え、同姓養子の關平の重要性を高めているのである。

こうした毛宗崗本においてとりわけ强調されている表現は、中國近世における同姓養子の重視を背景としていた[20]。中國近世の社會通念においては、器量が良く、武藝・學問に優れ、何よりも同姓であれば、申し分のない養子として迎え入れることができたからである。關平は

すべてを備えた養子として表現された。關平を立派に描くことは、異姓養子である劉封を相對的に貶める效果を高める。劉封を貶める理由は、曹操が異姓養子の子であることに加え、劉封の死去に係わり、劉備や諸葛亮の無謬性を貶める記述が、李卓吾本に存在したことにもある。

四、劉備・諸葛亮の無謬性

李卓吾本の諸葛亮批判は、劉封への賜死の記述に係わる。賜死の原因は、劉封が關羽を見殺しにしたことにある。關羽からの援軍要請に悩む劉封に對して、援軍を出す必要はないとする孟達の主張から、李卓吾本・第七十六回を掲げよう。(21)

孟達が笑って言うには、「公は彼を叔父だと言うが、①彼は公を草や芥だと思っていますぞ。むかし漢中王が位についた時、後嗣を立てようとして、孔明に尋ねました。孔明は、『これは家事です。關羽殿と張飛殿にお聞きになるのがいいでしょう』と言いました。王はそこで荊州まで人をやって關公に尋ねさせました。②彼はむっとして、『嫡子を立て庶子を立てないことは、古からの常理です。なぜまたわたしに聞く必要があるのですか。封は赤の他人の子、遠く山城に追いやって、骨肉の爭いを取り除くべきです』と言ったそうです。このことから見ると、どうして公を草や芥と思っていないことがあるでしょうか。これは天下の誰しもが知っていること、公はなぜ押し隱しているのですか」。

この場面を毛宗崗本・第七十六回は、次のように書き換えている。(22)

孟達は笑って、「將軍は關公を叔父だと言われますが、❶關公は將軍を甥などとは思っておりませんぞ。それがしが聞くところでは、漢中王がはじめ將軍を後繼ぎになさろうとした時、關公は不服そうにしていたということです。【前文と對應している。】のちに漢中王が位についたあと、後嗣を立てようとして、孔明に尋ねたそうです。すると孔明は、『これは家事なので、關羽殿と張飛殿にお聞きください』と言ったとか。漢中王がそこで荊州まで人をやって關公に尋ねられたところ、❷關公は將軍を赤の他人の子であるとし、正しくない者を立てるべきではないとして、【前文ではまだ言及していない部分を補っている。】漢中王に將軍を上庸の山城に追いやって、のちの禍をふさぐべきだと進言されたとか。【これは人を陷れるための孟達の作り話だ。】この事は誰しもが知っていることで、將軍が知らないはずはないでしょう。❸今さら叔父と甥の義などにこだわり、危險を冒し輕々と動く必要はありません。【こんな作り話で阻止し、何とも憎らしい。】

李卓吾本は、關羽が劉封を①「草や芥（草芥）」だと言っていると孟達に傳えさせ、劉封が關羽を見殺しにしたことは仕方がない、と受け取れる表現をする。これに對して、毛宗崗本は、「草芥」を❶「甥（侄）」に書き換えて、劉封が「侄」でありながら裏切ったことを斷罪する前提としている。第二十八回の書き換えで、關平と劉備を甥と伯父の關係としたことに呼應して、劉封と關平がここでも對比される。その上で、劉封が❸「叔父と甥の義（叔侄之義）」に背いたことを强調し、「義」絕の關羽を見殺しにしたことを「義」を棄てる行爲と表現する。

また、李卓吾本は、關羽が②「嫡子を立て庶子を立てないことは、古からの常理です（立嫡不立庶、古之常理）」と劉備に答えた、としている。「常理」という概念により、關羽の主張を一般化するのであ

る。これに對して、毛宗崗本は、關羽の返答を、❷「正しくない者を立てるべきではない（不可僭立）」と書き換え、異姓養子を立てることを關羽個人の意見として「僭立」という用語により批判させる。關平を迎える場合と同様、關羽が自分の言葉で異姓養子を立てることを批判し、異姓養子に反對する考えを主體的に表明したことを表現するのである。

こうして關羽を見殺しにした劉封は、劉備により死を賜わる。それより先、劉封は孟達から一緒に曹魏に降らないかと書簡を送られ、兩本ともにこれを破り捨てた、とする。劉封には、劉備への忠義心があったのである。その場面を李卓吾本・第七十九回から掲げよう。[23]

劉封は讀み終わると大いに怒り、「この賊はわたしに叔父と甥の義を誤らせ、また父と子の親を裂き、わたしを不忠不孝の者にしようとしている」と言った。そこで書面を破り捨てると、使者を斬った。……玄德は劉封の處分を決めかねていた。そこへ突然孔明が入って來たので、玄德は、「恥さらしがこんなことを言っているが、いかに處罰すべきだろうか」と聞いた。①孔明は耳元で、「この者は極めて剛強です。今取り除いておかねば、のち必ず子孫に禍が起こります」と言った。玄德はそこで左右の者に（劉封を）引き出させ斬るよう命じた。また劉封に付き添っていた兵士に尋ねてみると、多くの者がみな孟達が劉封に降參を勸めたことや、劉封が書面を破り捨てて使者を斬ったことをいちいち奏上し、また破られたという書面も、玄德に屆けられた。玄德は讀み終えると突然後悔をして、②「わたしの息子は剛強であったが、このように忠義の心も備えておったのだ。なんと愛おしいことか」と言った。そこですぐに刑の執行を停止するよう命じた時には、（劉封は）早くも斬られ、すでに首はもう堦の下に獻上されていた。玄德は慟哭して「わたしはとっさに輕率なことをして股肱の臣を失ってしまった」と言った。（すると）③孔明は「後嗣（劉禪）が長らく安泰であるためには、その者を殺して何を惜しむ必要がありましょう。大事をなす者が、女々しい心など抱いてよいのでしょうか」と言った。玄德は「たとえのちにわたしの子供を殺すことがあったとしても、④今日忠義の者を失ったことが耐えられないのだ」と言った。文官と武官たちは玄德の言葉を聞き、涙を流さない者はいなかった。武士は、「⑤劉封は刑に臨み、ただ孟子度の言を聞き入れなかったことが悔やまれる、そうすればこんな目に遭うことはなかった、と言っておりました」と奏上した。玄德は泣きながら、「⑥息子はあの世で、必ずやわたしを恨むであろう」と言った。漢中王は關公のことを思い、さらに劉封のことを惜しみ、ついに床に伏せてしまい、擧兵して、報復して恨みを晴らすこともできなかった。

この場面を毛宗崗本・第七十九回は、次のように書き換えている。[24]

劉封は書面を見るや大いに怒り、「この賊はわたしに叔父と甥の義を誤らせ、父と子の親を裂き、わたしを不忠不孝の者にしようというのか」と言った。そこで書面を粉々に破り、使者を斬り棄てた。……〔①削除〕左右の者に命じて（劉封を）引き出させ斬らせた。【このとき（劉封は）孟達の言うことを聞いて關公を助けなかったことを後悔し、一方で孟達の言うことを聞かずに魏に降參しなかったことを後悔している。】漢中王はすでに劉封を殺したが、❶そのあとで孟達が劉封に降參することを勸めたのに、（劉封が）その書面を破り使者を斬り棄てた事を知り、心中とて

も後悔した。〔②から⑥削除〕また關公の死に深く心を痛めたので、とうとう病氣になり、兵を束ねたまま動かなくなった。

李卓吾本では、劉備が②「わたしの息子は剛強であったが、このように忠義の心も備えておったのだ」と述べ、劉封に「忠義の心」があったことを劉備自身が述べている。これに對して、毛宗崗本は、劉封の發言である「不忠不孝の者」は繼承しながらも、②を削除することにより、劉封が忠義であろうとする發言を劉備が認めていないことにして、異姓養子である劉封の「忠義」を封印する。(25)

また、李卓吾本では、諸葛亮が、①「のち必ず子孫に禍が起こります」と述べ、將來に禍根を殘さないため劉封を處刑すべきだと進言している。李卓吾本の諸葛亮は、處刑の後に劉備が劉封の「忠義の心」を惜しむことに對して、③「大事をなす者が、女々しい心など抱いてよいのでしょうか（作事業者、豈可生兒女之情耶）」と說き、劉備の劉封への思いを「女々しい心」として否定する。これに對して、毛宗崗本は、李卓本の①と③をともに削除する。それにより、諸葛亮が劉封の處刑を積極的に主導した、という李卓吾本の諸葛亮像を大きく變更するのである。

さらに、李卓吾本では、劉封が死に臨んで、⑤孟達の言葉を聞かなかったことを悔やむ、という『三國志』劉封傳を踏まえた敍述がなされる。(26)その上で、李卓吾本は、⑥「息子はあの世で、必ずやわたしを恨むであろう」という劉備の泣き言を加える。これにより、劉封の最期の言葉と、『三國志』劉封傳にはない④劉備の泣き言を結びつけ、劉封が孟達の言に從わず、自分に背かなかったことに、劉備が思いを寄せて泣いたことを明らかにするのである。これに對して、毛宗崗本は、『三國志』劉封傳に基づく李卓吾本の⑤を削除し、④劉備の泣き言も削除して、劉備が劉封の處刑後、後悔して泣くことはない。

また、毛宗崗本は、李卓吾本では死を賜ってすぐに知ることになる、劉封が孟達の使者を斬ったことも、❶賜死後しばらくは知らされていなかったと設定する。しばらくしてから使者を斬ったことを聞き、後悔することで、劉備の仁德に傷をつけないように表現しているのである。もちろん、李卓吾本が採用した①諸葛亮が劉封の處刑を主張したことも、『三國志』劉封傳に基づくにもかかわらず、賜死理由からは除外される。これらの書き換えを通じて、毛宗崗本は、劉備と諸葛亮の無謬性を守ろうとしているのである。(27)

李卓吾本の諸葛亮への批判は、總評で述べられる。(28)李卓吾本・第七十九回の總評(29)に、

諸葛亮はまことに犬か豚であり、まことに奴才であり、まことに千古の罪人である。かれはどうして嘗て蜀の柱石となれたのであろう。もし眞心から蜀のためを思えば、自ずから劉封殺害を勸めるはずはない。つまり劉封殺害を勸め、（劉備の）手をかりて蜀の爪牙を切り取ろうとしたのは、まこと密かに圖るところがあったのである。愚かなり玄德、どうしてこれを分からなかったのであろうか。劉封は忠義である。玄德は知らずにこれを殺した、その罪はなお許すべきである。孔明は知りながらこれを殺した、その罪は誅を免れることはできない。さらに（その罪を）言葉によって飾ろうとしている。まことにこれは小人の過ちである。

とある。李卓吾本は、劉封の忠義を褒め、それを知りながらあえて劉封を殺した諸葛亮を激しく非難する。「諸葛亮はまことに犬か豚であり、まことに奴才であり、まことに千古の罪人である」との罵詈雜言は、中國歷代の諸葛亮評價の中でも珍しい低評價である。(30)これに對し

て、諸葛亮を「智絕」と高める毛宗崗本・第七十九回の總評では、劉備が劉封に死を賜ったことを次のように論じている。(31)

劉封には罪があるといっても、先主がこれを殺したことは、また當を得ない部分がある。劉封が關公を救わなかったことは、罪とすべきである。曹氏に降らなかったことは、許すべきである。後に孟達を拒んだことは、嘉すべきである。前に孟達の言を聽いたことを悔やんだことは、諒とすべきである。（劉備が）一人の義弟を失い、一人の義兒を殺したことは、まことに相反するものと考えることができる。これを殺そうと考えてすぐに召してこれを殺さず、軍隊を失い地を失わせ、その罪を重ねさせたことは、先主に三つの過失があったからである。かれは自ら（孟達の）降伏を得て兵を外に率いさせながら、魏に降る氣持ちはないと安心していた。その算を失したことの一である。一人の劉封を徐晃・夏侯尚・孟達の軍にあて、その敵わないことを明らかに知りながら、わざと派遣し、劉封ならびに五萬の兵を棄てた。その算を失したことの二である。孟達がすでに去ったのに、別の將に上庸を守らせることなく、申耽・申儀の反亂を招き、劉封に進退の道をなくさせた。これによって劉封ならびに上庸の地を棄てることになった。その算を失したことの三である。この三失があるので、先主がついにこれを悔やむのももっともなのである。

毛宗崗本は、劉封を全面的に否定することは避けながらも、劉封を忠義とする李卓吾本の評を取らない。その上で、劉備の「三失」を擧げ、劉備が悔やむべきは、劉封を失ったことだけではなく、「三失」にあるとする。劉封の重要性を低下させているのである。

そもそも正史の『三國志』には、諸葛亮が劉封の「剛猛」を恐れ、劉備にこれを除くよう勸めたことが明記されている。(32)李卓吾本の諸葛亮像の方が、史書のそれに近いと言ってよい。毛宗崗本は、劉備と諸葛亮の無繆性を守るために、史書の記述を離れてまでも、異姓養子である劉封の像を書き換えていると言うことができる。

曹操を異姓養子の子と批判しながらも、史實の劉備が異姓養子の劉封を收めていることについて、毛宗崗本は、李卓吾本よりも劉封を貶める表現を用いることで對應した。律で禁じられていた異姓養子を嗣として養子にした劉備が、異姓養子の死去を嘆く場面を削り、劉備の死後、劉禪のもと獨裁權を振るう諸葛亮が、劉封殺害を進言したことも削除した。こうした書き換えを可能にしたものは、異姓養子を取ることは行われていたが、それは本來行うべきことではない、という中國近世の社會通念であった。毛宗崗本は、かかる社會通念を背景とした表現技法を用いることで、異姓養子劉封の忠義を描かなかったのである。

おわりに

中國近世において、異姓養子を取り、宗族の秩序を亂すことは、律により禁止されていた。それでも、社會の實態として、繼嗣の確保のため異姓は養子に取られたが、それは望ましくないという社會風潮も根强く存在した。これに對し、同姓養子は、たとえ異宗の者であっても許されるとされていた。

『演義』において、關羽と劉備の二人の養子は、對照的な生き方を見せる。異姓養子である劉封は、關羽を見殺しにし、劉備により處刑される。一方、同姓養子の關平は、關羽とともに忠義を盡くし、關羽と劉備のために戰死する。

劉封が關羽を救わなかったことは、史實では辨明の餘地があり、『三國志』には、諸葛亮が劉封の處刑を主導したことが記される。李卓吾本は、毛宗崗本よりも史書に近く、劉封の忠義を主張し、諸葛亮を激しく非難する。毛宗崗本は、異姓養子は律で禁じられ、本來行うべきことではない、という中國近世の社會風潮を背景に劉封を貶め、劉備が異姓養子を取ることを諫めた關羽を贊美する。異姓養子の子である曹操に繋がる異姓養子劉封の忠義を封印するのである。さらに、毛宗崗本は、李卓吾本にある諸葛亮への非難およびその論據をすべて削除する。異姓養子は律で禁じられ、本來行うべきことではない、という社會風潮が、諸葛亮・劉備の無謬性を守る毛宗崗本のこれらの表現を支えた。

一方、關平は、史實では關羽の實子でありながら、『演義』は嘉靖本以來、これを養子とし續けた。そこには、同姓者は養子として望ましいという社會風潮が存在した。加えて、同姓養子である關平を關羽が主體的に迎えたと書き換えることで、關羽の義を強調するのである。

このように、毛宗崗本は、中國近世における養子に關する社會通念を利用して、關羽・諸葛亮・曹操という義絕・智絕・奸絕の人物描寫をそれぞれ鮮明に表現しているのである。

注

（1）毛宗崗本の特徴については、沈伯俊「論毛本《三國演義》」（『海南大學學報』一九九一―三、『三國演義新探』四川人民出版社、二〇〇二年に所收）を參照。また、毛宗崗本の評點から、毛綸・毛宗崗父子の小說觀と毛父子の思想を明らかにした論考に、上田望「『三國志演義』の毛綸・毛宗崗評點をめぐって」（『日本中國學會創立五十年記念論集』汲古書院、一九九八年）がある。

（2）仙石知子「毛宗崗本『三國志演義』に描かれた女性の義―貂蟬の事例を中心として」（『狩野直禎先生傘壽記念 三國志論集』三國志學會、二〇〇八年）、「毛宗崗本『三國志演義』に描かれた曹操臨終の場面について―明清における妾への遺贈のあり方を手がかりに」（『三國志研究』四、二〇〇九年）、「毛宗崗本『三國志演義』における母と子の表現技法」（『駿河臺大學紀要』三九、二〇一〇年）は、中國近世における社會通念を利用した毛宗崗本の表現技法を檢討したものである。

（3）同族から選ばれ息子に擬制される養子は「嗣子」「繼子」と呼ばれ、承繼を目的とせず恩養的に迎え入れられる養子は「義子」と呼ばれる（滋賀秀三『中國家族法の原理』創文社、一九六七年、第三章第一節・第六章第二節）。本稿は、それらの總稱として「養子」という日本語を使用する。

（4）曹操のほか、呂布もまた異姓養子であるかにみえる。しかし、呂布は、毛宗崗本・第三回に、「義兒」と表現される。すでに『三國志平話』より「義兒」と表現されている呂布は、異姓養子として扱うよりも、中國中世の軍隊における義兄弟・假子關係より考えるべきであろう。矢野主稅「唐代に於ける假子制の發展について」（『西日本史學』六、一九五一年）、谷川道雄「北朝末～五代の義兄弟結合について」（『東洋史研究』三九―二、一九八〇年）を參照。

（5）百忙中忽入劉曹二小傳。一則自幼便大、一則自幼便奸。一則中山靖王之後、一則中常侍之養孫。低昂已判矣（毛宗崗本・第一回總評）。なお、毛宗崗本は、醉耕堂本を底本とした『四大奇書第一種三國志演義』（中華書局、一九九五年）を使用し、時に刊本にあたって確認した。

(6) 今人好通譜、往往非族認族。試觀桃園三義、各自一姓、可見兄弟之約、取同心・同德、不取同姓・同宗也（毛宗崗本・第一回總評）。

(7) 族譜を併せて同族とする通譜については、多賀秋五郎『宗譜の研究（資料篇）』（東洋文庫、一九六〇年）を參照。吉原和男・鈴木正崇・末成道男（編）『〈血緣〉の再構築―東アジアにおける父系出自と同姓結合』（風響社、二〇〇〇年）もある。

(8) 明代における繼嗣の重要性と、その實態がどのように白話小說に反映しているかについては、仙石知子「族譜からみた明代短編白話小說の考察―「繼嗣」に關する族規を手がかりに」（『中國學論集』（大東文化大學大學院）一八、二〇〇一年）を參照。

(9) 一、無子、當以兄弟子爲後。不宜尊卑失序、卽無兄弟子、亦宜於近支中、昭穆相當者立之。書曰繼子某、本名下、書曰某公子、出繼某公爲嗣。若乞養異姓、致淆氏族、倒而屏之。（『山陰陡嶼朱氏宗譜』浙江紹興、六卷、朱福青等續修、光緒二〇年（一八九四年）序、思成堂木活字印本）。本稿で引用する族譜は、すべてユタ系圖協會所藏のマイクロフィルムによる。なお、族譜には、通譜が行われ信憑性に缺ける部分もあるが、本稿では、宗族内の秩序統制を目的に書かれた「譜例」「族規」という、改竄の可能性が低い部分を用いた。

(10) 其乞養異姓義子、以亂宗族者、杖六十。若以子與異姓人爲嗣者、罪同、其子歸宗（『大清律例』卷八 戶律・立嫡子違法）。

(11) 一、乞養 凡三十歲外無子者、族內自親至疎、亦無可承繼、方許收養異姓淸白之後爲子。限至五歲、方得入繼。如過五歲、不得收養。倘有子孫可以承嗣者、不得貪多濫收異姓。（『張氏族譜』廣東中山、三卷、張建孚等編、咸豐八（一八五八）年、鐵城袁思刊本）。

(12) 劉泌乃長沙人也、亦是漢室宗親、遂請玄德到家、設宴。時有外甥寇封侍立于側、玄德見封①人品壯觀、聲音淸曉。玄德問泌曰、此何人。泌答曰、此吾之甥男寇封也。②精熟武藝、父母雙亡、泌乃母舅、在此③倚傍學業。本羅睺（ママ）寇氏之子也。玄德④欲過房爲嗣。劉泌欣然從之、遂使其甥拜玄德爲父、改名劉封。玄德帶回、令拜雲長・翼德爲叔。雲長曰、兄長既有子、何必用螟蛉。後必有亂也。玄德曰、吾待⑤爲子、彼必待我⑥爲父、有何亂也。雲長不悅（李卓吾本・第三十六回）。李卓吾本は、蓬左文庫に所藏される吳觀明本の『李卓吾先生批評三國志』（ゆまに書房、一九八四年）を使用した。

(13) 那劉泌乃長沙人、亦漢室宗親、遂請玄德到家、設宴相待。只見一人侍立於側、玄德覩其人❶器宇軒昂、因問泌曰、此何人。泌曰、此吾之甥寇封、本羅侯寇氏之子也。因父母雙亡、故依於此。玄德❷愛之、❸欲嗣爲義子。劉泌欣然從之、遂使寇封拜玄德爲父、改名劉封。【忙中挾敍劉封承嗣事、却竝非閑筆。】玄德帶回、令拜雲長・翼德爲叔。雲長曰、兄長既有子、何必用螟蛉。後必生亂。【❹雲長收關平爲子、而獨不欲玄德收寇封者、臣之子無爭立之嫌、君之子則有爭立之嫌故也。】玄德曰、吾待之❺如子、彼必事吾❻如父、何亂之有。雲長不悅。【❼爲後孟達說劉封伏案。】（毛宗崗本・第三十六回）。

(14) 『三國志』には、劉備が劉封を「愛」したという記述はない。『資治通鑑』卷六十九、『資治通鑑綱目』卷十四には、劉封の死去を記す條の近くに、それぞれ「王甚器愛之」、「曹丕愛之」という記述があるが、「之」はともに孟達のことを指す。『綱鑑』には、記述がなく、注（1）所揭上田論文が、毛宗崗本が材料を得たとする、これらの本から劉封を「愛」した、という表現を繼承したわけではない。毛宗崗本獨自の書き換えと考えてよいだろう。

(15) ……其有愛繼外姓抱養血嬰、冒充己子者、須各房分長及族中公正之

人、合辭呈明。……（『毘陵薛墅吳氏族譜』江蘇武進、合二十三卷、吳晉等重修、民國二十二年（一九三三年）、履成堂活字印本）。

(16)「過房」という語彙は、承繼を目的に迎え入れられた養子「嗣子」「繼子」に對して用い、「乞養」という語彙は、異姓の「義子」の收養行爲に對して用いられた（注（三）所揭滋賀著書、第六章第二節）。仁井田陞『支那身分法史』（座右寶刊行社、一九四二年）第六章第四節も參照。

(17) 井上泰山・大木康・金文京・氷上正・古屋昭弘『花關索傳の研究』（汲古書院、一九八九年）の「I解說篇」（金文京執筆）によれば、元代までは關平を養子とする創作はなされていないという。竹內眞彥「關平が養子であることは何を意味するか」（『狩野直禎先生傘壽記念 三國志論集』前揭）も參照。

(18) 隨喚二子出拜。雲長曰、二子何名。①答曰、長男關寧、學讀書。次男關平、學武藝。……雲長迎門接拜、執手啼哭不止。關定領二子、拜于草堂之前。玄德問其姓名。②雲長曰、此人與弟同姓、欲令次子跟弟同去。玄德曰、年幾何。關定答曰、次子關平年一十八歲。③玄德曰、既長者有心令子跟雲長、吾弟又無子嗣。某願求令嗣與雲長、爲嗣若何。關定曰、若蒙主盟、願聽嚴令。玄德致謝。④關平自此、以雲長爲父。……⑤又添子龍、玄德歡喜無限、連飮數日、以慶賀兄弟再見之喜（李卓吾本・第二十八回）。

(19) 遂命二子出見。【又遇兩少年。此處且不敍明二子、妙。】……關公迎門接拜、執手啼哭不止。【劉關至此方才相見。啼哭二字宛然孺慕之誠。】關定領二子拜於草堂之前。玄德問其姓名。❶關公曰、此人與弟同姓、有二子。長子關寧、學文。次子關平、學武。【二子姓名學業、至此方補出、❷却用關公代說、妙。郭常之子不肖、關定之子又賢、又復閒閒相對。】關定曰、今愚意欲遣次子跟隨關將軍、未識肯容納否。【郭子不肖而郭常乞留之。關子賢而關定欲遣之。畢竟郭常不脫常情、關定自有定見。】玄德曰、年幾何矣。定曰、十八歲矣。❸玄德曰、既蒙長者厚意。吾弟尚未有子、今卽以賢郎爲子、若何。【❹此從同姓上想出。異姓者既爲兄弟、同姓者豈不當爲父子耶。】關定大喜、❺便命關平拜關公爲父、呼玄德爲伯父。【關公本爲尋兄、忽然得子。玄德方見一弟、又認一侄、奇文奇事。❻前玄德於途中遇殺妻爲食之劉安、今關公於途中遇遣子爲嗣之關定。亦遙相映照。】……❼又新得了趙雲、關公又得了關平・周倉二人、歡喜無限、連飮數日。【其實可喜。】（毛宗崗本・第二十八回）。

(20) 中國近世において、同姓の者が繼嗣の適格者として律に揭げられていたことについては、注（3）所揭滋賀著書、第三章第一節を參照。

(21) 達笑曰、公以彼爲叔、①彼以公爲草芥耳。昔者漢中王登位之時、欲立後嗣、問于孔明。孔明曰、此家事也。問于關・張可矣。王遂致書遣人往荊州問于關公。②彼勃然曰、立嫡不立庶、古之常理。又何必問于我乎。封乃螟蛉之子、使住山城之遠、免遺禍于親骨肉也。以此觀之、安得不以公爲草芥乎。天下皆知、公何隱耶（李卓吾本・第七十六回）。

(22) 達笑曰、將軍以關公爲叔、❶恐關公未必以將軍爲侄也。某聞、漢中王初嗣將軍之時、關公卽不悅。【照應前文。】後漢中王登位之後、欲立後嗣、問於孔明。孔明曰、此家事也、問關・張可矣。漢中王遂遣人至荊州問關公、❷關公以將軍乃螟蛉之子、不可僭立、【補前文之所未及。】勸漢中王遠置將軍於上庸山城之地、以杜後患。【此是孟達挑撥之語。】此事人人知之、將軍豈反不知耶。❸何今日猶沾沾以叔侄之義、而欲冒險輕動乎。【如此挑撥阻撓、可恨可惡。】（毛宗崗本・第七十六回）。

(23) 劉封看畢大怒曰、此賊悞吾叔侄之義、又閒吾父子之親、使吾爲不忠不孝之人也。遂扯了書、斬其使。……玄德猶豫未決。忽孔明入、玄德問曰、孱子如此、何法治之。①孔明附耳低言曰、此子極其剛强。今不除

之、後必生禍於子孫也。玄德遂令左右推出斬之。又問隨封將士、衆皆將孟達說封之事、及劉封扯書斬使之事一一奏稱、又將扯毀的書信、呈與玄德。玄德看畢急問心曰、②吾兒雖然剛强、有此忠義之心也。凜然可愛。便叫留人之時、却早斬、已獻首級于堦下。玄德慟哭曰、孤一時造次廢股肱矣。③孔明曰、欲嗣主久遠之計、殺之何足惜也。作事業者、豈可生兒女之情耶。玄德曰、縱使他日殺孤之子、④孤不忍今日廢忠義之人也。文武聞之、無不下淚。武士奏曰、⑤劉封臨刑、但云悔不聽孟子度之言、果有此危矣。玄德泣曰、⑥孤兒至九泉之下、必痛恨於孤矣。漢中王思想關公、更惜劉封、致染成病、不能興兵、報仇雪恨（李卓吾本・第七十九回）。

(24) 劉封覽書大怒曰、此賊誤吾叔侄之義、又聞吾父子之親、使吾爲不忠不孝之人也。遂扯碎來書、斬其使。……〔①削除〕命左右推出斬之。【此時悔聽孟達之言而不救關公、又悔不聽孟達之言而不降魏矣。】漢中王既斬劉封、❶後聞孟達招之、毀書斬使之事、心中頗悔。〔②～⑥削除〕又哀痛關公、以致染病、因此按兵不動（毛宗崗本・第七十九回）。

(25) 笠井直美「隱蔽されたもう一つの忠義―『水滸傳』の「忠義」をめぐる論議に關する一視點」（『日本中國學會報』四四、一九九二年）は、『水滸傳』における忠義の國家への收斂を主張するとともに、小說における忠義の特殊性を說くが、『演義』には適用できない。

(26) 『三國志』巻四十 劉封傳に、「先主 封の剛猛なるを慮り、易世の後、終に制御し難ければ、先主に勸め、此に因りて之を除かんとす。是に於て封に死を賜ひ、自裁せしむ。封 歎きて曰く、「孟子度の言を用ひざるを恨む」と。先主 之が爲めに流涕す（先主貴封之侵陵達、又不救羽。諸葛亮慮封剛猛、易世之後、終難制御、勸先主、因此除之。於是賜封死、使自裁。封歎曰、恨不用孟子度之言。先主爲之流涕）」とあり、陳壽は劉封が自殺させられた理由として孟達に敗退し、關羽を救わなかったことのほか、諸葛亮が勸めたことを擧げている。

(27) 毛宗崗本の劉封の處刑場面が改作されていることについては、陳翔華『諸葛亮形象史研究』（浙江古籍出版社、一九九〇年）上編第九章「二、毛本《三國志演義》對諸葛亮形象的修改和批評」においてすでに指摘されており、毛宗崗本が文字の修訂を通して、諸葛亮の言動や行動が、父子の間における封建倫理に背かないような記述にした、と論じられている。

(28) 李卓吾本・第七十六回の總評では、劉封は關羽を救えなかったものの、その情には許すべきものがある、とする。なお、これに對して、毛宗崗本・第七十六回の總評は、劉備の養子である劉封を許すことはできないと厳しく斷罪している。

(29) 諸葛亮眞狗彘也、眞奴才也、眞千萬世之罪人也。彼何嘗爲蜀渠。若眞心爲蜀、自不勸殺劉封矣。卽其勸殺劉封、乃知借手剪蜀爪牙、實陰有所圖也。蠢哉玄德、何足以知此。劉封忠義。玄德不知而殺之、罪猶可原。孔明知而殺之、罪不容誅矣。更將言語文飾。眞是小人之過也（李卓吾本・第七十九回總評）。

(30) 中國歷代の諸葛亮評價については、王瑞功（編）『諸葛亮研究集成』（齊魯書社、一九九七年）、渡邉義浩『諸葛亮孔明―その虛像と實像』（新人物往來社、一九九八年）を參照。

(31) 劉封雖有罪、而先主殺之、亦未得其當也。其不救關公也、可罪。其不降曹氏也、可原。其拒孟達於後也、可嘉。則其悔聽孟達於前也、亦可涼。而喪一義弟、亦殺一義兒、誠計之左矣。且旣欲殺之、不卽召而殺之、而使喪師失地、以重其辜、則先主有三失焉。彼自知獲戾而將兵於

外、安保其無降魏之心。其失算者一。以一劉封當徐晃・夏侯尚・孟達之師、明知其非敵而故遣焉、是棄劉封幷棄五萬人。其失算者二。孟達已去、不更令別將以守上庸、而至有申耽・申儀之叛、使劉封進退無路。是棄劉封幷棄上庸之地、其失算者三。有此三失、宜先主之終悔與（毛宗崗本・第七十九回總評）。

(32) 注（26）に掲げた『三國志』巻四十　劉封傳。なお、諸葛亮と劉備との關係が、毛宗崗本に描かれるような信頼と忠義との關係によって結ばれていないことは、渡邉義浩「蜀漢政權の成立と荊州人士」（『東洋史論』六、一九八八年、『三國政權の構造と「名士」』汲古書院、二〇〇四年に所收）を參照。